

特色ある教育研究：Communication Server による「実験授業」の成果と今後の展開

——英語による発信能力育成のための海外との
インターラクティブなコンピュータ支援英語教育をめざして——

久 村 研

背景 ～「はじめに」にかえて～

昨年度に引き続き本年度も、本学園当局の「特色ある教育研究」に対する予算化及び日本私学振興・共済事業団からの助成という恩恵を授かり、4月当初からマルチメディアコンピュータ支援による英語の「実験授業」（主に Computer English）を開始することができた。ここで「実験授業」と称するのは、次のような背景があったからである。

昨年度の基礎研究（久村・印藤・村井，1999，「マルチメディアコンピュータによる効果的英語教育の展開に向けての研究」、『紀要』第31号，調布学園短期大学）において、コンピュータ支援英語教育（CALL）の推進は本学の特色となりうることを、文献研究，視察，調査データによって示唆した。しかし、その段階ではまだ、本学特有のCALL教育のシラバスを、真に具体的な意味で提示しえなかった。したがって、全学科をあげての取り組みを直ちに開始できない状況であった。日々刷新されるコンピュータ機器，技術及びソフトウェアの，どの断面を切り取って導入するか，それらの機器やソフトウェアを利用して，どのような教育を展開するかを定めるのは容易なことではない。そこで，筆者が英語教育の観点から発想するさまざまな指導方法・指導展開と，村井講師が持っているハードウェアとソフトウェアの知識・技術とをぶつけ合いながら，十数回に渡ってブレイン

ストーミングを行うこととなった（Computer English 以外の教育展開については印藤助教授も加わったことを付記する）。新しいコンピュータ導入に伴う教室の改造、コンピュータやプリンターなどの教室への設置、サーバーやソフトウェアの調整やインストール、等々が、情報処理の石原助手の協力をえながら、我々のブレインストーミングと同時に進行していった。Computer English の通年の授業シラバスのイメージと、前期のシラバス、授業用ホームページが完成したのは、入学式を終えた4月上旬、どうにか授業開始に間に合う時期であった。

このように、指導者側がある意味で手探りの状態であったこと、実際に指導する筆者がコンピュータに関する知識や操作技術が不足し、かつCALL教育の経験が皆無であったことで、自ずからその授業は「実験」と称せざるを得なかったのである。どうにかイメージを構築できたのは、中部大学の「情報英語」、岩淵のメール・プロジェクトなど、モデルとなる先例があったおかげである（前掲『紀要』参照）。

目 標

この授業の目標を一言で言えば、

「英語による発信能力（特に fluency）の育成」

である。もちろんコンピュータの基本的な操作技術を習熟させる必要はあるが、あくまでも英語の授業であり、学生の英語力を高めるための授業でなくてはならない。学生には次のようにこの授業の目標を掲げた。

1. 情報機器を用いて英語力を高める。
2. 情報機器を用いて生きた英語にふれる。
3. 情報機器を用いて英語で発信する能力を見につける。
4. マルチメディアを用いて効果的な英語によるプレゼンテーション能力を身につける。
5. 情報機器を用いて英語によるコミュニケーション能力を身につける。

この目標を達成するために与えた中心課題は、

1. 英語によるホームページの作成（前期），
2. 海外との英語によるメッセージ交換（後期），

の2つである。この2つのうち、ホームページの作成は、学生を海外とのメッセージ交換に導いていく前提条件として位置付けた。いずれにしても本学学生にとってこの課題ははじめての経験であり、当初はとても達成できないと思われていた課題でもあった。しかし、計画的な手順と方法に従えば、学生の意欲を喚起し、課題を達成できるはずである、という信念に基づいて「実験授業」を開始した。

シラバス

前期、後期とも各12回の授業シラバスを作成した。概要は次の通りである。

<前期>

- 第1回 オリエンテーション。
- 第2, 3回 コンピュータ操作基礎解説。
- 第4, 5回 リテラシー教育（タイプ基本ソフト，メール交換練習）。
- 第6, 7回 インターネットによる情報収集の方法（インターネットサーフィン）。
- 第8, 9回 英語の自己紹介文の作成。
- 第10, 11回 英語の自己紹介ホームページの作成
- 第12回 英語の自己紹介ホームページを電子出版。

<後期>

- 第1, 2回 個人ホームページの完成。
- 第3, 4回 電子掲示板によるグループディスカッションの準備。
- 第5～10回 1999 Chofu-Whitireia Project（電子掲示板 Webcrossing によるメッセージ交換）。

第11, 12回 Chofu-Whitireia Project のまとめ (メッセージ交換の成果を各自のホームページ上でまとめ公開する)。

前期シラバスの変更

前期の全般に渡って、コンピュータ業者の不手際で、ハードに限らずソフトウェアのインストールが大幅に遅れた。そのため、予定していた上記のシラバスの変更を余儀なくされた。例えば、Eメールとインターネットへの接続の大幅な遅れは、授業計画に多大な影響を及ぼした。第3回で「ホームページを見て答える」という課題は、中部大学の学生のホームページを見て問題に答えさせるものだが、これができなかつたり、4回目に開始予定のメール交換練習が5回目にずれ込んだり、6, 7回のインターネットサーフィンが8, 9回に回り、結局英語による自己紹介文の作成と同時進行で行わなければならない、という状態であった。結局、授業に必要なすべての機能が立ち上がったのは、6月の半ば過ぎであった。この影響はホームページの作成を遅らせ、筆者のクラス全員が前期終了時にホームページを開設できない、という事態となった (具体的な内容は「英語によるホームページの作成過程」の項参照)。後期のシラバスの1, 2回目を「個人ホームページの完成」としたのはこのためである。

受講の心構えと履修学生

これまでの総合科目「コンピュータ」の例から、受講希望者が殺到するだろう、というのが当初の予測であった。新規導入されたコンピュータは30台であるから、1クラスの人数制限は30人 (3クラス立て) ということになる。このため、まず受講対象を2年生に限定し、さらに2年生全体のオリエンテーション時に「Computer English 受講希望者へ」というちらしを配った。概要は次の通りである。

1. 第1回目の授業に必ず出席すること。

2. 英語の授業であって、コンピュータの授業ではないこと。
3. 毎週課題があること。
4. 欠席した場合でも、課題は必ずやらなければならないこと。
5. この授業に向いているかどうか自己診断をしてから履修すること。
6. 授業以外の時間にも自学自習が必要であること。
7. 評価はでき上がった作品で行うので、積極的に取り組まなければ単位取得は難しいこと。

このちらしが効を奏し、いや、効を奏しすぎ、筆者のクラスでは第1回目の授業を覗きにきたのが14～5名、残った学生は12名であった（他の2クラスはそれぞれ7名と5名という全く予想外の結果であった）。しかし、この人数は筆者にとって幸いした。「実験授業」としてはまことに具合のよい数だったからである（「反省点と今後の展望(1)履修学生」の項参照）。

さて、このある意味で「厳しい」受講の心構えを知った上で履修に踏み切った学生が、どの程度のコンピュータ使用経験、履修の動機と英語学習の目標などを持って臨もうとしているのかを前もって把握するために、第1回目の授業で簡単なアンケートをとった（注：このアンケートは、受講希望者が30名を超えた場合のスクリーニング用として役立てることも意図していた）。結果は次の通りである（履修学生12名のうち1名は前もって第1回目の授業に欠席の連絡があったので、アンケートに答えた学生は11名であった）。

<アンケート結果>

1. 今までにコンピュータ（ワープロを含む）を使ったことがある 11
（使える機能：ワープロ 9 / Eメール 2 / インターネット
3 / 表計算 3 / ホームページ 0）
2. 自宅に使えるコンピュータがあるか？（ある 4 / ない 7）
3. Computer English を受講する理由は？（複数回答可）
 - 1) 実用的な英語を身につけたい 8

- 2) パソコン操作を身につけたい 8
- 3) ワープロくらいできるようになりたい 2
- 4) インターネットを使いこなして勉強にも役立てたい 7
- 5) Eメールを使って英語で海外とコミュニケーションしたい 6
- 6) 自分のホームページを英語で作りたい 3
- 10) インターナショナルな人になりたい 5
- 12) 新しいことにチャレンジしたい 9
- 13) 将来留学や海外勤務を希望している 4
- 14) この授業は普通の授業より魅力的 6
- 15) コツコツがんばっていける性格 1
- 16) 自分の英語をなんとかしたい 6

*注：7) 簡単に単位がとれそう, 8) 課題が多くてやりがいがありそう,

9) パソコン通, 11) 英語が得意, の4項目は回答0であった。

- 4. 持っている資格は? (英検3級 4 / 英検準2級 5)
- 5. 短大卒業時にとりたい資格は?
(英検2級以上 8 / TOEIC 500点以上 3)
- 6. 一番つけたい英語力は?
(聞く力 1 / 話す力 8 / 読む力 1 / 書く力 1)

上記の結果, この授業を受講するのにふさわしくない(つまりコンピュータ操作技術習得の授業と勘違いしている) 学生も含まれていることが判明したが, このような学生には, 今後意識を高めるよう指導していくこととした。

英語によるホームページの作成過程

シラバスでも明らかなように, いきなり英語でホームページを作成させるという無謀な計画は立てられない。CALLの授業で避けて通ることがで

きないのが、コンピュータ基本操作指導である。導入したばかりのコンピュータということもあり、電源入力から切断に至る一連の流れが分かるように、Computer English の授業ホームページ上で操作手順が見られるように工夫した。前半はインターネットとEメールが外部とつながらない状況が続いたので、村井講師と石原助手の協力で、授業ホームページに取り込んだ材料を使って、内部でなんとか授業を組み立てることができた。また、キータイプの基本ができていた学生がほとんどいなかったため、インストールしたタイプ基本ソフトで練習する時間をとった。Eメールとインターネットが使えるようになって、ようやくホームページ作成へと動き出した。その過程は、概略次のとおりである。

1. 学生にホームページのイメージをつかませるために、中部大学「情報英語」の学生のホームページ、海外の自己紹介フォーラム、ホームページ作成に役立つ英語表現集、その他情報を得るために必要なリンク先を授業ホームページに載せた。
2. 第5回目からEメールが使えるようになったので、ホームページのために作成している英文を、週1回メールで著者に送ることを課題とした。1回目のメールでは、ほとんどの学生がわずか2～3行の英文しか書いていなかったため、6回目の授業で、中部大学の学生のホームページと英語表現集を開けさせ、それらを参考にどのように文章を作っていたらよいか、つまり scaffolding の方法を指導した。その方法を会得した学生は、2回目のメールから15行以上の英文を送ってくるようになった。学生によって進捗状況に大きな違いが出たものの、6月末から7月にかけて、ほとんどの学生がA4判で1枚以上の英文を書き上げることができた。英文を書かせる過程で重視したことは、文法や語彙・語法に注意を向けさせることではなく、書く内容を豊富にするよう激励することであった。英文の誤りをいちいち正していると、先に進まないし、学生のやる気を削ぐことになるからである。

3. 一応ホームページ用英文原稿が出来たといっても、まだ2つの課題を残している。ひとつは、それをホームページの体裁に整えること（つまり2～4つの項目に分類して整理すること）、もうひとつは、意味の分からない英文を意味の通る（intelligible な）英文に直すこと、である。前者については、Profile または Self-introduction, Interests or Hobbies, My family, Activities, My Hometown などの項目を立てて、英文をアレンジさせたり、さらに文章を付け加えさせる指導を行った。通じる英語に直す作業は、全体の体裁が整ってから最後に行うこととした。もちろん、授業中に質問があったり、個人の指導を行うときには、その都度部分的な訂正の作業は行っていた。ホームページとして公開する以上、最低意味の通る英文にしておかなければならないのは当然である。
4. ハードとソフトウェアのインストールの遅れと、英文作成に時間がかかり、結局前期終了時にホームページを立ち上げることができないことが判明した。そこで、前期終了時までには作り上げた英文をEメールで送ることを前期最後の課題とし、それに基づいて評価することにした。全体の訂正作業は後期の始めに回さざるをえなかった。
5. 後期開始前までにEメールで送られた英文原稿を著者が訂正しておいて、後期の1・2回目の授業でホームページのレイアウト（デジカメやスキャナーの使い方の指導は石原助手にお願いした）を行いながら英文を完成する作業を行った。ホームページのアップロードは後期2回目の授業が終了した後によりやく行うことができた。ただし、アップロードはすべて石原助手にお願いしたが、来年度からは自動発行システムを利用できるようになる。また、このホームページは、どこからでもアクセス可能である。

1999 Chofu-Whitireia Project の立ち上げ

上述のように、前期には学生のホームページをアップロードできなかった。しかし、後期に計画している海外とのメール交換プロジェクトの準備を夏休み中に終えておかなければならない。そこで、まず村井講師と、Eメールによる交換にするか、掲示板（BBS）による交換にするか、について相談することとなった。結論はBBS（正式名称：Chofu Communication Server <<http://www2.chofu-c.ac.jp>> — Com. Server）に落ち着いたのだが、その主な理由は、あらゆるメッセージを指導者がコントロールできること、すべての記録が残ること、個人とグループとにわけてメッセージを交換することが容易であること、などである。BBSのソフトウェアとして村井講師が推奨したのがWebcrossingであった。その機能や操作の容易さから、海外とのメッセージ交換はWebcrossingで行うことを決定した。

一方、昨年9月の視察の際に、メッセージ交換プロジェクト可能の言葉を頂いていたニュージーランドの首都ウエリントン近郊のポリルアにあるWhitireia Community Politechnicの学習コーディネーターAnn Devoy先生にEメールで連絡をとった。積極的な返事がすぐに返ってきた。そこで直ちに具体的なプロジェクトを立ち上げるために、次のような提案を行った。

1. Whitireiaの学生を10人集めること。その学生の条件は、(1) 日本に関心があること、(2) きちんとした英語で、できるだけ易しい英語が使えること、(3) 調布の学生とほぼ同世代であること、(4) 調布の学生のメッセージが滞った場合には励まして話題を提供できること、(5) Whitireiaの学生1人が、調布の学生2～3人を担当すること（Computer English 3クラスの学生全員が対象）、の5点である。
2. メッセージの交換に先立ち、Whitireiaの学生各自は簡単な自己紹介ホームページを作っておくこと（調布の学生が交換相手を知るため）。
3. 10人の学生に指導者を1人つけること。

4. このプロジェクトを1999 CHOFU-WHITIREIA PROJECT と名付け、メッセージの交換は10月28日（木）開始、12月10日（金）終了とすること（ただし、今年は実験的な試みであることも添えた）。
5. 以上の条件で、必要経費を計算して知らせてほしいこと。

Devoy 先生からこの提案に理解を示すメールが折り返し入った。また、日本では事務局長にあたる役職の Tony Gan 氏からも費用を計算しておく旨のメールが入った。数日後、Devoy 先生から1～4に関し提案通り学内調整できた旨の連絡が入り、ひとまずこのプロジェクトを立ち上げる道筋をつけることができた。その後の情報で、Whitireia 側では、9月中旬に学生を公募し10人を選んでおくこと、9月下旬から10月上旬の2週間は休みなもので、10月16日（土）に学生を集めてホームページを作らせること、その際に学生と契約書を取り交わすこと、従って10月28日のプロジェクト開始日には間に合うこと、などが明らかになった。あとはシラバス通りに授業を運ぶことである。費用については11月上旬に Gan 氏から連絡があり、交渉の結果総額 NZ\$ 3,500 と決定した。また、11月半ばにはこのプロジェクトの記事が、大学発行の月刊新聞に大きく報じられている旨のメールが入り、Whitireia 側の期待が伝わってきた。

Communication Server によるメッセージ交換

英語によるホームページ作成は、このプロジェクトに学生を導く前提であった。ホームページを作成しながら、学生たちはインストールしてある辞書（学研グランド辞スパー辞スパ）やその他の機能、また、英文作成のための資料などをある程度使いこなせるようになり、正確さ（accuracy）には欠けるが通じる（intelligible な）英語を書く流暢さ（fluency）も多少ついてきた。何よりも「英語で積極的にコミュニケーションをしようとする態度」が生まれてきたことは見逃せない。

後期3回目の授業からいよいよ Com. Server を登場させることとなった。

その指導過程と経過はおよそ次のようなものである。

1. Com. Server のしくみ，利用方法，ルールとマナーの指導。
2. Com. Server 上の各自のフォルダー（List of Chofu students のフォルダー内）からホームページへのリンク作成。
3. ディスカッションのトピックに関するブレインストーミング。
4. 6組のペア（他の2クラスを併せると全部で10組）を作り，それぞれディスカッションのトピックを決定（New Years Day, Festivals, Wedding, Everyday Life, TV Programmes, Fashion）。
5. 交換相手の Whitireia のために Com. Server 上に Whitireia Site を設けて，そこに List of Whitireia students のフォルダーを置き，そこから交換相手のホームページへリンクを張った。
6. 授業ではディスカッションのトピックについて，ペアで相談しながら協力して英語を作り，各個人のメッセージ交換は授業以外の空き時間に行うよう指導（ディスカッションをペアとしたのは，一人では負担がかかり，メッセージの交換がとぎれる可能性があるからである）。
7. 本格的なメッセージ交換は第5回目11月4日（木）から開始された。
8. 12月10日まで続いたメッセージ交換の途中，インターネットシステムの故障，Whitireia 側の操作ミス，また Whitireia の学年末試験などがあり，若干メッセージ交換の停滞時期はあったが，おおむね順調に進行した。

Discussion: 各ペアは3～5回投稿した。New Years Day, Wedding(他のクラスの Sports, Music) などのトピックはかなりの盛り上がりを見せた。Festivals では日本の単一文化の側面と，ニュージーランドの多元文化の側面が浮き彫りになった。つまり，日本で全国的に行われるようなお祭り行事はニュージーランドにはなく，それぞれの民族が小規模な行事を行う程度であるから「ニュージーランドは退屈な国だ」などというメッセージが届き，学生を考えさせた。Fashion では，日本

で流行っている服装についてメッセージを送ったのだが、「ファッションとは自己を主張するもので、みんな同じ格好をすることではない」とか、「学生だからファッションにお金をかける余裕などない」などの回答が寄せられ、その後の議論の展開に戸惑っていた。Everyday Lifeについても、日本との交通事情や習慣の違いが話題にのぼっていた。

個人フォルダー内での交換：ディスカッションに平行して個人のフォルダーにメッセージが寄せられた。終了時点までに10回に及ぶメッセージの投稿を行った学生が1人出たのは予想外の収穫であった。それも内容的に「話題提供+質問」→「回答+話題提供+質問」と対話形式で展開していくものであった。あとは4回投稿が2人、3回が1人、2回が1人、1回が4人、他の2名は残念ながら投稿回数0で、フォルダーにはWhitireiaの学生のメッセージだけが並んでいる、という状況であった。因に、他の2クラスの学生たちは多少投稿はしているがメッセージ文が短く、「交換」の域には達していなかった。しかし、中にはWhitireiaの学生のフォルダーにメッセージを送る学生もいて、この交換プロジェクトを楽しんでいる様子がうかがえた。このフォルダーは各自の自由に任せるものであったが、これもディスカッションと同様な指導が必要であるかもしれない。

Project のまとめ作業

第10回目（12月9日）から、交換プロジェクトのまとめ作業に入った。まとめは次の3点で行うように指示した。

1. ディスカッションにおいて、これまで交換してきたメッセージを読み、(1) メッセージ交換の回数、(2) 自分たちが出したメッセージ内容のまとめ、(3) Whitireia から受け取ったメッセージ内容のまとめ、(4) 両者を比べて分かった文化（価値観）の違い、(5) このプロジェクトの感想、の5項目を Com. Server 上の自分たちのフォルダーに掲載する。その

- 際、原稿はマイクロソフトワードで作成し、掲示板に貼り付けること。
2. 個人フォルダーについても 1 と同様の作業をする。
 3. 1 と 2 が終了したら、各学生はマイクロソフトワードで作成した原稿をもとに、自分なりに内容をアレンジして、各自のホームページに加える。

以上を 1 月 13 日の最終授業で完了することが課題である。(注：このまとめ作業の結果は、この論文には間に合わない。学生の反応に関する報告を含め、いずれ発表の機会を作りたい。)

評価の観点

本講座の評価はでき上がった作品がすべてであることを学生たちに前もって知らせてあるが、細かな評価の仕方については話していないし、またその必要もない。しかし、ここではどのように評価を下すのか、あるいは、どのような評価の観点があるのかを論じておくことは意味のあることであろう。

まず、コンピュータ操作に関する観点である。この授業はコンピュータ操作を教える授業ではないといっても、ホームページ作成とメッセージ交換に関わる最低限の操作技術は必要である。そこで、以下の操作がスムーズに行えるかどうかを毎回の授業で観察しておく必要がある。この観察によって、授業以外の時間に、どの程度パソコン教室を利用しているかが大体わかる。

1. 電源入力と切断をスムーズに行えるか。
2. Eメールとインターネットを使えるか。
3. キータイプはどの程度の速度と正確さを持っているか。
4. マイクロソフトワードによるワープロ機能を使えるか。
5. マイクロソフトワードから Web ページあるいは Eメール、掲示板に文書の貼り付けが自由にできるか。

6. インストールされている辞書を使いこなせるか。
7. 掲示板に自由に投稿できるか。

このほか、デジカメ、スキャナ、プリンター等の使い方、Web ページやホームページビルダーなどを使ったホームページの作成などは、英語教員以外の技術者の助力を得なければならないので、評価の観点には入らないであろう。また、これらの観点は、授業の進行によって変わってくることは当然である。

次に、評価の柱となる英語力である。授業目標「英語の発信能力（特に fluency）の養成」を基準に、次の観点で評価することにした。

1. 作成した英文の量（メッセージ交換の頻度も含む）（fluency）。
2. 話題の構成と展開。
3. 英文のわかり易さ（intelligibility）。
4. 英文の語順，文法，語法の正確さ（accuracy）。
5. 語いの豊富さ（語い力）。

上記で、特に重視したのが1と2である。周知のとおり、学生たちはさまざまなヒントや情報がないと、日本語でも文章が書けない。まして、英語においておや，である。ほっておいたらホームページは、絵や写真で構成された、情報量の少ない寂しいものになってしまうし、メッセージ交換は成立不能になる。この1と2には、前提として「参考情報（中部大学の学生のホームページ，英語表現集，など）の利用」「インターネット，新聞，テレビ，ラジオ，雑誌，などからの情報収集」が含まれている。

反省点と今後の展望 ～「結び」にかえて～

この「実験授業」によって、Computer English（2000年度から「コンピュータ英語」に名称変更）は本学英語教育の際立った特色となるという確信を深めた。今後は英語科専任教員全員が、何らかの形でこの講座に関わることが求められるのではないだろうか。つまり、今後の本学英語教育のキー

ワードを「コミュニケーション」「国際」「情報」「文化」という4つの言葉に集約できるとすれば、この講座はその4つすべてを包括しているからである。急いで付け加えるが、この講座だけで教育目的を達成できる、ということでないのはもちろんである。他の基礎、資格、専門、教養講座などと相互補完的に機能させてはじめて教育効果が発揮されるわけである。インターネット上の膨大な英語による情報や海外から送られてくるメールなどを読み取る力、異文化に対する知識や理解力、日本語・日本文化に対する正しい認識と知識、英文作成の fluency と accuracy, 等々他の講座との連携で育成していくという視点がなければ、この講座は本当の意味での本学の特色とはなりえない。

さて最後に、この「実験授業」の反省点を踏まえ、今後「コンピュータ英語講座」をどのように展開していくべきか、個々の課題に対し解決策を考察する。

1. 履修学生

本年度は2年生の指定科目とした。理由は、受講学生の数絞ること(1クラス定員30名)、2年生の方が英語の学力とモチベーションが高いと想定したこと、そして1年次に総合科目の「コンピュータ」を履修して操作技術に慣れている学生が履修すると判断したことである。この結果現われたプラス面をあげるなら、筆者のクラスは12名で、人数が少なすぎる、という誹りはあるが、「実験授業」としてはこの程度の人数で幸いした。それに、学力とモチベーションの比較的高い学生が多かった。

一方、この方針の甘さも露呈した。1年次に「コンピュータ」を履修した学生でも、使用するコンピュータとソフトウェアが全く変わってしまったので、ほとんど初心者と同じであったこと。2年生は平均週3日しか登校せず、しかも就職活動があるため授業に欠席したり、自習の時間がなかなかとれないという現実を見逃していたこと。さらに、2年生でせつかく海外との交換プロジェクトの楽しさを体験し、英語の fluency

を少しは獲得しても、すぐに卒業してしまうという、重要な視点を欠いたことは、本年度の失敗と言える。

以上を踏まえると、来年度からは1年生にも受講させるべきだろう。むしろ、1年生中心の授業の方がよいかもかもしれない。この授業によって、英語学習に対するモチベーションを高める学生が増え、2年次にはさらに充実した学習をすることが期待できるからである。さらに、コンピュータ操作技術やこの授業の内容を十分理解し習得した学生に、次年度授業アシスタント（TA）を頼むという可能性も出てくるかもしれない。

2. 「マルチメディアコンピューティング」の同時履修

本年度には2名の学生が「コンピュータⅢ」(来年度から「マルチメディアコンピューティング」に名称変更)を同時履修していた。ふたりのコンピュータ操作は、前期の半ば以降、他の学生をはるかに凌ぎ、ホームページ作成が最も早かった。来年度は1年生も受講することから、この講座を同時履修させることをすすめたい。操作を早く身につけて、英文作成に集中させるためである。

3. TAの授業への張り付け

本年度は石原助手が毎時間授業に張り付いてくれた。授業担当者がまだ十分な操作技術を身につけていない状態なので、来年度も是非お願いしたい。理想的には、教育者と技術者が役割を分担してこの種の授業を計画、構成、展開し、前年度に履修した学生の中から優れた者をTAとして雇う、という体制をシステム化することであろう。

4. ホームページ作成とメッセージ交換準備の開始—前期シラバスの変更—

この講座の目標は、「海外とのインターラクティブなメッセージ交換による英語発信能力（コミュニケーション力）の育成」である。この「実験授業」では、なんとか交換まで辿りついた、という程度である。交換内容をさらに高めるためには、ホームページの作成時期をもう少し繰り上げ、交換の準備を前期に組み入れる必要がある。

ホームページ作成の際、学生たちは授業ホームページに掲載したリンク先と辞スパだけを利用しながら英文を作ることができた。メッセージ交換を念頭に置いて、インターネットを自ら開いてそれを活用しながら内容を豊富にするところまでには至らなかったが、それでも、ほぼ皆同時に完成にこぎつけた。ということは、授業ホームページからアクセスできるウェブサイトの利用の仕方を指導すればホームページを作成できるということになる。「インターネットによる情報収集の方法」の指導は、ディスカッションのテーマや情報を探る活動と結び付けたほうが効果が上がるかもしれない。なぜなら、後期に交換を始める前に、情報やアイデアを蓄えておくことができるからである。そこで前期シラバスの後半を次のように変更したい。

第6, 7回 英語の自己紹介文の作成（授業ホームページの活用）。

第8, 9回 英語の自己紹介ホームページの作成

第10回 英語の自己紹介ホームページを電子出版。

第11, 12回 電子掲示板によるディスカッションの準備（インターネットによる情報収集の方法／Discussion Topic の選定とグループ分け）

5. 交換プロジェクトの開始時期と交換期間

今年度は11月始めから12月始めのおよそ1カ月であった。クラスの学生から、期間が短くこれからという時に終わってしまっていて物足りない、という感想が聞かれた。来年からは、少なくとも2カ月の交換期間が欲しい。そこで、12月の始め、Ann Devoy 先生に、今回の交換プロジェクトの終了を告げるメールを送ったとき、同時に Whitireia の学生の反応と来年度のこのプロジェクトの可能性についてたずねてみた。次の4点が主な返信内容であった。

- (1) 学生の反応はすこぶるよかった。
- (2) 来年度も是非実現したい。

- (3) 10月末から12月は学年末試験の時期で最悪である。しかし、どうしてもというのであれば、なんとかする。
- (4) 一番都合がよいのは4月26日～6月30日、あるいは、7月17日～9月22日の期間である。

以上の返信から、来年度は10月初旬～12月初旬としたい。本年度の実験の結果、11月下旬の10日間ほど、Whitireiaからのメッセージ数が極端に減った。この期間を除けば、ほぼコンスタントにメッセージが届いていた。そのため調布の学生が、それに追い付けない、という状況が生まれた。したがって、この期間を利用して、メッセージの書き方について再指導を行うことができた。Whitireiaに対しては、9月中に学生グループを組織し、10月の初旬からメッセージ交換ができる体制を作っておくよう要望を出しておきたい。

6. 予算の確保

今年度は「特色ある教育研究」の2年目で、当初から予算を確保することができた。来年度以降も、このプロジェクトを推進するためには、交換相手校に支払う費用、授業の助手に支払う人件費、必要に応じて追加するソフトウェア代、など毎年予算化しておかなければならない。

7. その他の課題

最後に、この「実験授業」を通して、今後取り組む必要があると思われる課題について列挙しておく。

- (1) 学生の作成する英文の量と質を高める。

方策1：参考とする英語表現集を充実させる（役に立つ英語表現を場面・機能・概念別に分類し、活用させる）。

方策2：パラグラフの構成と展開に役立つ資料を作成する（「比較対照」「因果関係」「定義」「分類」「意見と理由」「具体例」「分析」などの展開法とその表現を分かりやすい形で提示し、活用させる）。

- (2) 日本文化に関する参考資料の充実（書籍，CD-ROM などとその管理方法）。
- (3) 複数の専任教員の各年輪番担当。
- (4) 半期科目とすることの可能性（前期：ホームページ作成，後期：メッセージ交換，とする。問題は，後期のメッセージ交換の準備と開始時期）。
- (5) 自習室の拡大・充実（ノートパソコンの貸出しを含めた管理体制）。
- (6) 交換相手の開拓（ニュージーランドのほか，マウイ，ウーロンゴン，ブリティッシュ・コロンビアの可能性を探る）。
- (7) 海外の日本語学習者との両言語を用いたメッセージ交換（日文科との共同プロジェクト。ウーロンゴン大学との可能性大）。
- (8) コンピュータ支援教育の全学的枠組みを構築する。

構想：コンピュータ支援教育（学習）を学科（コース）の枠を超えて設定する。「リテラシー」，「英語発信」，「日本語発信」を3本の柱とし，相互に関連を持たせる（上記(7)参照）。「リテラシー」教育の基礎（半期）は基本的に必修とする（ただし，基礎のできている学生の扱いを検討する要あり）。「英語発信」教育は，本研究を基礎としてさらに発展させる。「日本語発信」教育については別途専門チームを組んで研究する。いずれも半期科目（A，B）とし，学生が自由に選択できるものとする。

(注) ハードおよびソフトウェア関連についての研究報告は，村井講師の論文を参照されたい。